

小学校国語科教材分析と授業実践事例

——『サーカスのライオン』・『ゆうすげ村の小さな旅館』・『はりねずみと金貨』の場合——

白瀬浩司 白谷佳苗 平田莉恵 佐野叶恵

九州女子大学人間科学部人間発達学科 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2016年11月10日受付、2016年12月8日受理)

序

ひとつの物語作品を、読者の立場で読み取ることと、それを授業者(教員)の立場で教材として授業することとの間には、ある種の^{けいてい}径庭が存在する。自身が読み取った内容を、学習者(児童)たちに読み取らせるために編み直す手続きが求められるわけだから、当然のことである。

教材分析は、学習者たちの想いや意見を踏みつぶしてしまわぬためにも十全になされねばならない。その上で、教室の状況に応じた学習指導案(授業指導案)へと編み直されるべきだ。当然ながら、大人である授業者の読解と子どもである学習者のそれにも径庭のあることは否めない。しかし、だからといって、国語科授業を授業者の読解成果を^{ひれき}披瀝する時と場所にしてしまってはならぬこともまた、無論である。学習指導案への編み直しは、教室の児童ひとりひとりの顔や声を想起しながら取り組んでいきたいし、教室における児童の肉声に、適宜、応じられるような指導案へ仕上げていきたいところだ。

本稿では、『サーカスのライオン』(川村たかし・文、西村達馬・絵)、『ゆうすげ村の小さな旅館』(茂市久美子・文、菊池恭子・絵)、『はりねずみと金貨』(ウラジーミル・オルロフ文、田中潔訳、バレンチン・オリシバング絵)を教材分析の対象として取り上げ、同時に、授業実践の事例を示すことにする。ちなみに、三作品いずれも小学校三年生の国語科教材として、それぞれ現行の教科書(平成27年度版)に収載されている¹⁾。

本稿の各章第1節で三つの物語の作品構造や主題について分析を行い、各章第2節でそれぞれの教材の学習指導案と授業実践事例を示していく。ただし、今回の学習指導案は、大学の学生を児童役とする模擬授業に向けてまとめられたもので、さらに全体の指導計画も全五～六時間に凝縮した設定ゆえ一時間(45分)あたり通常の小学校授業の一・五倍～二倍の内容を盛り込んでいる。したがって、小学校の国語科教室の一時間枠にそのまま流用しえぬ点もあるだろうが、授業展開のアイデアや工夫は十分に持ち込み可能なはずである。また、本時案にあたる部分だけを略案に近い書式で記載してあることも予め申し添えておく。

なお、序・結および各章の第1節(I-1・II-1・III-1)を白瀬、第1章の第2節(I-2)を白谷、第II章の第2節(II-2)を平田、第III章の第2節(III-2)を佐野が分担執筆した。ゆえに、白瀬の監修を経てはいるが、各節の文責はそれぞれの執筆者に帰するものである。

1-1. 『サーカスのライオン』教材分析

物語の序盤では、〈ライオンのじんごは年取っていた〉という語りを、あたかも証拠でてるかのような描写が重ねられていく。

老いたライオンは、檻おりの中で〈一日中ねむって〉おり、若き日の自分がアフリカの草原を〈お父さんやお母さんや兄さんたち〉と共に〈風のように〉駆け抜ける夢をよく見た。サーカス興行における彼の出番は火の輪くぐりで、二・三本の火の輪ならば、ライオン使いがよそ見をしていても、ルーティーンとして無難にこなすことができた。

夜になって、サーカス団員の男と交わす会話にも、それは示される。白濁はくたくした瞳と元気のないジャンプなどと他者からの指摘を俟つまでもなく、じんご自身、「わしはおいぼれたよ」と告げて、明らかに肉体的な衰えを自覚しているが、最近の夢にいつも家族が現れていたのは——彼が最年少であることを思えば、既に父母も兄も亡くなっている可能性が高いから——彼の死期の近きことの予兆であったかも知れない。団員の男に促されるまま人間の姿に扮装し、気分転換のため夜の散歩に出た彼は、いきなり一人の男児から声をかけられる。「昼間サーカスを見たときは、何だかしよげていたの」というのが、ライオンが大好きだという男児(これまた他者)の眼に映ったじんごの姿である。ただし、この言葉を聞いたときのじんごの〈ぐっとむねのあたりがあつくなった〉という描写は、しっかり踏まえておきたいところだ。

この男児と過ごす時間が物語の中盤を形成していくのだが、同日は夜も遅かったため、じんごは男児を自宅アパートまで送っていった。男児の父親は夜勤で留守、母親は入院中、姉は母親の付き添いで不在だという。じんごと男児とが共通する点は、家族構成(父母と年上のきょうだい)と、(男児の方は仮初かりそめながら)独りぼっちの時間を過ごしていることである。男児のためにピエロの真似をしておどけていたとき、じんごは溝に足を突っ込んで挫くじいてしまう。

翌日からサーカス興行最終日の前日まで、男児は自分の好物のチョコレートたずさを携えてライオンの檻を訪れる。まだ〈ずきんずきんと〉痛む足をそつと隠し、じんごは男児が半分に分けて差し出すチョコレートを、苦手なくせに嬉しそうに食べるのだった²⁾。

以前は〈一日中ねむっていた〉じんごも、いまや男児の来訪を、毎日、〈もうねむらないでまっていた〉。そして、男児の語る母親の話を、身を〈のり出して、うなずいて聞〉くのである。興行最終日の前日、男児が母親の退院が間近であることと、最終日にサーカス観覧に来ることを告げた。男児の帰宅後、〈体に力がこも〉り、その目を〈ぴかっと光〉らせたじんごは「わかいときのように、火の輪を五つにしてくぐりぬけてやろう」と決意する。

物語の終盤には、同日の夜更けから翌日に至るまでが描かれていく。夜半に響くサイレンの音で、じんごは目を覚ます。テントの隙間から男児のアパートの辺りほのが仄赤いさまが見えた。

檻を破り、〈足のいたいのもわすれて、むかし、アフリカの草原を走ったときのように、じんごはひとかたまりの風になってすつとんでいく〉。まさに老いた彼が夢に見た若き自身の姿と重なるような描写だ。アパートに辿り着くと、消防車は未着、男児が部屋に取り残されて

おり、救助に入れぬほど火勢は激しかった。それでも、じんごは火中に飛び込み、階上へ駆け上がる。気絶した男児を抱きかかえ、窓から外へ出ようとしたが、あまりに高いので、さしもの彼も飛び降りることができない。やがて到着した消防車が彼の雄叫びに気づいて梯子をかけ、消防士が男児の身柄を引き受ける。煙と炎に包まれ、じんごの姿は見えなくなった。

やがて、人々の前に、ひとかたまりのほのおがまい上がった。そして、ほのおはみるみるライオンの形になって、空高くかけ上がった。ぴかぴかにかがやくじんごだった。もう、さっきまでのすすけた色ではなかった。／金色に光るライオンは、空を走り、たちまちくらやみの中に消え去った。

サーカス興行の最終日、ライオンの曲芸では五つの火の輪が用意されていた。それをくぐるじんごの姿はないにもかかわらず、観客たちの惜しめない拍手が響きわたる。

最高潮の場面において〈さっきまでのすすけた色〉のじんごが、〈ぴかぴかにかがやく〉〈金色に光る〉ライオンへと変化するさまは、火事場における描写でありながら、《男児と出会う前のじんご》と《男児に出会った後のじんご》の形象とそれぞれ響き合うものだと言えよう。

また、結末部に主人公のいない舞台が描かれ、観客の拍手が注がれたことで、夜更けのじんごの行動場面を、象徴的に《火の輪くぐり》に見立てうる構造となっている。すなわち、火事場＝火の輪が《入れ替わり・身替わり》のための仕掛けとして機能しており、その仕掛けのあちら側からじんごが飛び込み、仕掛けのこちら側へ男児が飛び出してくるという按配だ。もちろん、こちら側へ男児をはじき出す力が作用しなければ、若き命はそこで失われるはずだった。

わずかな期間のふれ合いだけで、じんごが命を賭したのは腑に落ちぬとする向きもあろう。老いた命と若き命を死と生に分かちつつも、この物語の論理は両者を家族のもとへ送り出す。あちら側から飛び込み、ぴかぴかの火の輪くぐりを演じたじんごは、若き日のごとく空を駆け、懐かしい家族のもとへ旅立った。死の淵からこちら側へ飛び出してきた男児は、やがて退院する母親をはじめ、(独りぼっちな状態から)再び家族と過ごす時間を生きていく。

1-2. 『サーカスのライオン』授業実践事例

この作品は、ライオンのじんごが男児と出会い、変化していく様子が書かれた物語である。

年老いたじんごは、同じことを繰り返す日々をつまらなく感じ、ときが来るのをただ待っていた。そんなじんごが男児との出会いをきっかけに心情・言動に変化が表れる。この出会いを軸にして前後の変化を気づけるような指導を行う。

また、男児の住むアパートで火事が起こり、男児を助けるためにじんごは火に飛び込んだ。その結果、じんごは命を失ってしまう。このことを、《死んでしまった可哀想なじんご》という捉え方ではなく、《死んでしまったけれど、男児との出会いがじんごの生涯をいい終結に導いた》というような捉え方ができるように導きたい。

授業展開は本時案(資料1)に示したとおりである。読み進める中で、じんごの言動の変

化を捉えられるようにする。

まず、じんざが男児と出会う前後の変化がわかる箇所に傍線を引く活動を行う。言動の変化だけでなく、この活動では《色》にも着目してじんざの変化を児童が気付けるようにしたい。

次に、なぜじんざは男児を助けたのかについて考える活動である。一人ひとりがじんざの立場に立って考えることで、じんざにとって男児の存在がどのようなものだったか気づくことができるだろう。次に、「じんざは死んでしまった。しかし……」に続く文を考えることでじんざにとって良かったことを児童が考え、《死んでしまった可哀想なじんざ》とは違った捉え方に繋げるねらいがある。

変化を見つけ、じんざの立場で考える活動から児童が主体的に心情・言動の変化の原因に気づくことができるだろう。また、活動後の授業者によるまとめは次の通りである。

「じんざは火災現場に飛び込んで、男の子を助けることができたよね。でも、じんざは死んでしまいました。火災が起きたのは男の子のアパートでした。先生は、その火災現場を、大きな火の輪ではないかと考えています。それはじんざにとっての《ゴール》、男の子にとっての《スタート》だと思うのです。そうすると、じんざが草原を駆け回っていたアフリカにいた頃を思い出し、勇敢にゴール（火災現場）に飛び込む行動と、男の子がスタート（火災現場）から助けられたことで飛び出し、まるで《命のリレー》が行われているように思えますね。死んでしまったじんざは天国で家族と再会し、男の子は退院したお母さんや家族とまた一緒に暮らせて、どちらも一人で寂しかった思いがなくなりました」

このように、まとめの活動では、男児との出会いによってじんざの人生は大きく変化したが、じんざは『故郷を懐かしみ寂しい思い』、男児は『家族と暮らすことができている寂しさ』という共通する《寂しさ》という背景を生かしまとめる活動で、それぞれにとって良い影響であったと伝えたい。また、この授業で行ってきた活動を、絵を使って《リレー》という児童にとって身近なものとして繋げることで、思い浮かべやすく記憶に残ると考えた。授業後に感想を書かせると、授業が児童にどのように受け止められたか知ることができ、改善に役立つだろう。

今回、模擬授業を行ってみて、男児との出会いがじんざの人生を大きく変えたことを良い影響として考え伝えることがすごく難しかった。読み進める中で、「男の子と出会わなければじんざは死なずに済んだのではないだろうか」という疑問がついてまわり、どうしても児童は悪い影響のように考えてしまった。しかし、じんざと男児それぞれの立場で良かったことを読み取り、考えることで授業のまとめで行ったような良い影響に気づくことができた。

最初の活動で戸惑っている様子が窺われたが、《色》に着目して考えることに気づかせるような促しを行うと、児童が気づき、傍線を引けるような変化が見られた。教師が行う助言とは、その活動の良し悪しにも繋がると実感できた。予め様々なことを想定し対応できるような準備が授業にはすごく大切だと思った。次の活動で行った「しかし……」に繋がる文を考える活動では、逆説の接続詞を使うことで自然に良い影響を考えられるように繋げることができた。

【資料1】『サーカスのライオン』学習指導案

第3学年1組 国語科学習指導案（略案・本時案）

平成28年 6月28日 第1時限 3年1組教室
(在籍児童数 男子12名、女子15名、計27名)
授業者 柴田百合恵、白谷佳苗、鹿毛咲綾

1. 単元名・教材名

感想を伝え合おう・『サーカスのライオン』（川村たかし・文、西村達馬・絵）

2. 教材観および授業構想

本教材は、ライオンのじんざと一人の男児との出会いを描いた物語である。あらすじは次のようになっている。町外れで興行するサーカスに、ライオンのじんざは所属していた。年老いたせいとか、いつも寝てばかりで、自分の番が来ると火の輪をくぐり抜ける、という単調な毎日の繰り返しだ。ある夜、サーカス団員に勧められ、気晴らしのため人間に変装して散歩に出た彼は、ライオン好きの一人の男児に出会い、その子を自宅アパートまで送り届ける。元気がないライオンを励ましたいと語った男児は、以後、じんざを訪ねてくるようになり、ふたりは（男児の持参した）チョコレートを分け合いながら、いろいろな話をする。興行最終日の前夜、火事を告げるサイレンで目覚めたじんざは、それが男児のアパートの方角だと気づき、檻を破って一目散に駆け出した。部屋に取り残された男児を救出するため、彼は火の中へ飛び込む。何とか幼い命を救えたものの、じんざが炎の中から生還することはなかった。

本教材には、年老いたライオンが若さ（やる気・心の張り・生き甲斐）を取り戻し変化する姿が、男児との出会いを挟んで対照的に描かれている。例えば、三つしか飛ばなかった火の輪を（若い頃と同じ）五つに増やそうと決意し、白く濁った目で煤けた姿だった彼が、瞳も身体も金色に輝く姿へと変わっていく。また、ふたりが通じ合う背景として、互いに寂しさを抱えている（じんざ＝家族はアフリカ、男児＝父は夜勤、母は入院、姉は母に付き添う）という共通点が設定されたことも指摘できよう。もちろん、じんざだけが一方的に励まされた訳ではなく、男児だけが一方的に救われた訳でもない。互いが互いを思いやる双方向的な《絆》が育まれ、互いが大切な存在となっていたのである。

私は、本教材の主題を次のように捉えている。人は誰でも支え、支えられる関係性の中で生きているものだ。声をかけ、手を差し伸べること、元気づけること、一緒に泣いたり笑ったりすること——大切な誰かと共に在ることの安心感や心地よさは、私たちが困難を乗り越えたり、成長したりするときの糧となるはずだからである。

本授業は、登場人物の心情の読み取りを軸に据えて進めていくことにする。したがって、男の子とじんざ双方の心情を時系列に沿って丁寧におさえることは言うまでもないが、男の子と出会う前後のじんざの心情の変化を対比的に把握させた上で、彼が男の子を助けたことの意味を考察させるところまで辿り着きたい。そんな確かな読み取りを経て、次の最終感想を書く活動へと繋いでいく。

3. 指導計画（全6時間）

第1時間目…全文通読、新出漢字・読み替え漢字の確認、難解語句の確認、初発感想。

第2時間目…第一場面（P10.L1～P11.L14）の読解。

第3時間目…第二場面（P12.L1～P15.L11）の読解。

第4時間目…第三場面（P15.L12～P17.L8）の読解。

第5時間目…第四場面（P17.L9～P21.L5）の読解。 ……【本時】

第6時間目…第五場面（P22.L1～P22.L13）の読解、まとめ、最終感想。

4. 本時の学習活動（第5時間目）

- (1) 目標 ①じんざの様子の変化をおさえ、男の子との出会いが契機であることを理解する。
 ②じんざが男の子の命を助けた理由を想像し、じんざの気持ちを捉える。

(2) 展開

過程	学 習 活 動	指導上の留意点〔評価事項〕	時間
導入	1. 前時の学習内容をふり返る。	○前時の学習内容をふり返らせる。 題名、作者、登場人物、場面の様子など	5分
展開	めあて じんざが男の子と出会って、どのようにへん化したか読み取ろう。		38分
	2. めあてをノートに写し、斉読する。	○めあてを板書し、指差しつつ斉読させる。	
	3. 第四場面を通読する。	○指名読みにより、1人ずつ読ませる。	
	4. じんざが男の子と出会う前後の変化がわかる箇所には傍線を引く。	○机間指導を行い、傍線を引けずにいる児童には、適宜、助言する。 例) 色に注目してみよう、など	
	5. 傍線を引いた箇所を発表する。	○児童の発言を板書し、必要に応じて補足説明する。〔評価①〕 一日中寝ていた→ねむらないで待っていた/のそりと立ち上がる→はねおきた/すすけた色→ピカピカにかがやく	
	6. じんざが男の子を助けた理由を考え、発表する。	○本時までの学習から理由を考えさせる。 児童の発言を板書する。 心配してくれたから/毎日会いに来てくれたから/チョコをくれたから	
	7. じんざの死が単に悪いことではなく、良かった点もあることに気づく。	○じんざにとって良かった点について気づかせるよう促す。	
	8. 気づいたことを発表する。	○児童の発言を板書する。〔評価②〕 ひとりぼっちではなくなった/男の子という大切な存在ができた/昔を思い出させてくれた/わかさを取りもどせた	
	9. じんざと男の子が互いに与えたものについて考える。	○図を用いて、じんざと男の子が互いに何を与えたか整理しながら説明する。 男の子 → 元気 → じんざ 男の子 ← 命 ← じんざ	
	10. 《命のリレー》について聞く。	○《死》を人生のゴールと捉えさせ、火事の現場で《命のリレー》が行われたことを説明する。(じんざ→火事場→男の子)	
	まとめ じんざは男の子と出会って、わかいころの自分らしさを取りもどすことができた。		
	11. まとめをノートに写し、斉読する。	○指差しつつ斉読させる。	
終結	12. 次時の学習内容を知る。	○第五場面の読解を行うことを予告する。	2分

(3) 評価

- ① じんざの様子の変化をおさえ、男の子との出会いが契機であることを理解することができたか。
 ② じんざが男の子の命を助けた理由を想像し、じんざの気持ちを捉えることができたか。

II-1. 『ゆうすげ村の小さな旅館』教材分析

この物語の枠組は、動物の報恩譚（例えば『鶴の恩返し』）のごとき様相を呈している³⁾。すなわち、旅館の主人つぼみから山の畑を借り受けた父親と、その恩返しのため旅館の手伝いにやってきた娘——出会う際はいずれも人間の姿ながら、実は兔の父娘——が、やがてその正体を見顯されてしまうという展開なのである。

物語の序盤では、つぼみの現状と宇佐見父娘との経緯が語られていく。つぼみは、夫を亡くし、小さな旅館を一人で切り盛りしていたが、若葉の季節に〈山に林道を通す工事〉の関係者六人を滞在客として受け入れる。若い頃なら平気で対応できる人数だったものの、さすがに年齢のせいか、〈一週間もすると、ふとんを上げたり、おぜんを持ってかいだんを上ったりするのが、つらくなってきた〉。ある日、食材の買い出しから戻る彼女が、道端でふと漏らした独言「せめて、今とまっているお客さんたちが帰るまで、だれか、手つだってくれる人がいないかしら」に応ずるかのよう、翌朝、美月と名乗る娘が現れ、「わたし、こちらの畑をかりてる宇佐見のむすめです。父さんが、よろしくって言っていました。これ、あの畑で作ったウサギダイコンです」と告げた。宇佐見が山の畑を借りたいと申し出たのは、去年の秋のこと。夫の死後、耕す者もなく〈草ぼうぼう〉に荒れた畑を、つぼみは〈そのままにしておくのが気になって〉いたので、快く貸したのだ。「こちらからおねがいたいほどです。おれいなんていりませんからね」と応じた彼女には、返礼を求める気持ちなどなかったはずである。

物語の中盤で、美月の仕事ぶりとともに、彼女の作るダイコン料理のエピソードが綴られていく。語り手によると、〈むすめは、くるくるとよくはたらきました。そうじもせんたくも、さっさとして、まるで、むかしから、ゆうすげ旅館を手つだってきたみたいなのです〉という。美月の提案で、その日の夕食の献立は〈たんぼの花とよもぎの葉っぱのてんぷらに、ゆずみそのふるふきダイコンと、ダイコンのサラダ、それから、ぶりのてりやき〉となり、〈てんつゆにも、やき魚にも、たっぷりのダイコンおろし〉が添えられた。滞在客の好評を得て、旅館では〈ダイコンづくし〉の献立が続くことになる。ある日、仕事を終えて戻った滞在客の、

「近ごろ、耳がよくなったみたいなんです。小鳥の声や、動物の立てる音が、実によく聞こえるんです。おかげで、工事であやうくこわすところだった小鳥の巣を見つけて、ほかにうつしてやりましたよ」

という言葉に、つぼみも思い当たることがあった。彼女もまた〈遠くの小鳥の声や、小川のせせらぎ〉や〈はるか遠い山の上をふく風の音〉を聞き分けられるようになっていたのである。

二週間が過ぎ、林道工事を終えて滞在客たちが引き上げると、美月も暇を申し出る。畑のウサギダイコンが収穫期を迎えており、父親一人では大変だからだという。「しゅうかくがおくれると、まほうのきき目がなくなってしまうんです。(中略) 耳がよくなるまほうです。夜は、星の歌も聞こえるんですよ」——自分や滞在客の耳がよくなった理由を、つぼみは合点した。彼女が給料袋を渡そうとするも、美月は固辞し、「とんでもない。畑をかりている

おれいです」と告げて〈おじぎをすると、にげるように帰ってい〉くのであった。

物語の終盤には、美月が旅館を去った翌日と翌々日の出来事が綴られる。給料を受け取ってもらえなかったので、つぼみは町で美月のために〈花がらのエプロン〉を購入し、山の畑へ向かう。畑に着いた彼女の眼に飛び込んできたのは、二匹の兎の姿だった。(たいへん、ウサギが、畑をあらしているわ!)と慌てるも、ほどなく兎たちがダイコンの収穫をしていることに気づく。つぼみは、エプロンの包みに宛名を書いて畑に置き、静かに立ち去った。その翌朝、旅館の台所の外に〈一かかえほどのダイコン〉が置かれ、こんな手紙が添えられていた。

「すてきなエプロン、ありがとうございます。きのう、おかみさんが畑に来たのが、足音でわかったのですが、父さんもわたしも、ウサギの姿を見られるのが、何だかはずかしくて、知らんぷりしてしまいました。いそがしくなったら、また、お手つだいにいきます。どうぞ、お元気で。ウサギの美月より」

〈見るな〉という禁忌タブーが設定されていないせいか、報恩譚で正体見顕みあらわしの後に訪れる悲しい別れといった結末は、つぼみと宇佐見父娘もたらに齎されない。人間であるつぼみと動物である父娘の交流は、互いへの思いやりに裏打ちされつつ、これからもずっと続いていくことが予見される。物語中盤における美月の旅館への来訪が〈体が楽になったばかりか、楽しく幸せな気持ちになりました〉と語られ、退去の際に〈つぼみさんががっかりすると、むすめは、下を向きました〉と描かれた通り、(また、先の手紙の内容と照らしても)夫と死別したつぼみにとっては、もはや独りぼっちでなく、新たな《家族》きずな的な絆を獲得したことに他なるまい。

さらに、両者の交流は、一見すると私的なものではあるが、この物語世界の人間と動物にとって最初の一步でもあろう。その先に——ウサギダイコンの効能で林道工事の人々が小鳥の巣を移動させることができたごとく——これから自然界へ入り込んでくる人間による無益な破壊や殺傷を回避させ、自然の中で人間と動物が共存する姿が見据えられていると言えそうだ。

II-2. 『ゆうすげ村の小さな旅館』授業実践事例

この作品は、互いに思いやりの行為・品物を贈り合う人間と動物の交流を描いた物語である。物語の中の出来事を、時を表す言葉に気をつけて場面分けをし、場面ごとどのような出来事が起きたのかを確かめる作業を学習活動として重点的に行う。本作品の一連の学習を通して、あらすじを正確に読み取り、物語の仕掛けに繋がる言葉に気をつけて読むことで、言葉の力や物語の面白さを感じられることを児童たちにおさえさせたい。

本時案(資料2)に示した通り、美月がなぜ人間の姿でつぼみさんの前に現れたのかということに重点を置いて授業を進めていく。本作品を一度読むと美月は畑を借りているお礼に、旅館の切り盛りを一人でこなすつぼみさんの手伝いをするために現れたと理解できる。しかし、本当にその理由だけで現れたのか、美月の気持ちになり別の理由を考えることで、美月が伝えたかったであろう事実を学び取っていく。本授業は全五時間の最終時限である。第四

時間目までに本文の読み取りは終了しているため、本時では、

「物語ではウサギダイコンだったけど、みんなが料理をする立場だったら、毎日同じ材料ばかりを使って料理して、おもてなしするかな？」

と発問し、児童一人ひとりが美月の気持ちになって、美月の心情や意図を読み取る活動を促す。ここで児童たちに、美月はつぼみさんやお客さんにどうしてほしかったのか、何に気づいてほしかったのか、を明確にさせる。

これらの活動によって主体的に物語を捉え、本教材の目標でもあるあらすじの正確な読み取りや、作品世界の時の流れを正しく理解する技能につながると考える。その際、前時の復習として、つぼみさんは小鳥の声や自然の音が聞こえるようになったこと、お客さんは小鳥の声が聞こえるようになり巣を壊さずに済んだことや、動物の立てる音が聞こえるようになったことをおさえている。そのため、美月がなぜウサギダイコンを使って料理したのか、毎日食べさせたということが、意図的な行為であるならば……。

「美月がウサギダイコンばかり使って料理をふるまった、はっきりとした目的や考えはなんだろう？」

という問いを投げかけ、児童たちに考えさせる。この時、お客さんには「自然の音や動物の声に気づいてほしかったから」、「自然の中には、たくさんの動物がいて、生活の場があることを伝えたかったから」といった解答が出てくるようヒントを与えながら促していく。つぼみさんには「自然の音を聞いて、自然を感じられれば、幸せで穏やかな気持ちになれることに気づいてほしかったから」、「日々の生活の中で、自然の音に耳を傾け、ゆとりを持って生活してほしいと思ったから」という解答が出てくると、意図的な行為の目的として望ましい。ここで、美月は畑のお礼で手伝いにきただけでなく、自然界の代表として、つぼみさんやお客さんに《自然の大切さ》や《人間と自然が共存し合っていること》を伝える目的を持って現れたのだと気づかせる。

物語の中では美月とつぼみさん、つまり動物と人間が関わり合い、仲良くしている。それに比べて、現在を生きている児童たち（人間）と動物・自然は仲良くできているかという問題につなげ、指導を行う。加えて、物語では最後に美月がどっさりとうサギダイコンを贈り、添えられた手紙には再びつぼみさんの旅館に手伝いに行くこと記されていた。つまり美月とつぼみさんの関係は長く続くものであり、人間と動物、そして自然は仲良く共に生きていかなければならないことを理解させる。

今回は時間の都合上、児童たちに授業内で最終感想を書かせる余裕がなかったが、児童たちの最終感想から、思いやりの交流によって人間と動物（自然）がより一層強く結びつき、繋がりが合い、支え合うということの大切さや、物語の中だけでなく、私たちの生活にも関係する事柄であり、国語科で出会う物語は生活にも繋がっていること、そして物語の仕掛けの面白さなどを感じたというような感想が出てくれば、この活動をした成果があったと言えるだろう。

【資料2】『ゆうすげ村の小さな旅館』学習指導案

第3学年2組 国語科学習指導案（略案・本時案）

平成28年 7月5日 第2時限 3年2組教室
(在籍児童数 男子11名、女子12名、計23名)
授業者 坂田盟夢、平田莉恵、別府 絢

1. 単元名・教材名

物語のしかけをさがそう・『ゆうすげ村の小さな旅館』（茂市久美子・文、菊池恭子・絵）

2. 教材観および授業構想

本教材は、互いに思いやりの行為・品物を贈り合う人間と動物との心の交流を描いた物語だ。あらすじは次の通りである。ゆうすげ村の小さな旅館を、つぼみという老女が独りで切り盛りしていた。久しぶりに六人もの滞在客（林道工事関係者）を迎え、彼女がふと漏らした手伝いを求める独言に
応じるように、美月という娘が現れる（つぼみが山の畑地を無償で貸与した男・宇佐見の娘である）。掃除や洗濯、料理に至るまで美月はよく働いた。彼女の作るウサギダイコン（貸与された畑で収穫）の料理は客に大評判で、連日、大根づくしの献立が続く。その料理のおかげか、つぼみも客も聴覚が鋭くなり、客たちは林道工事の際に鳥の巣を壊さずに済んだと語るのだった。二週間後、客が去り、美月も帰っていく。謝礼金を固辞した美月にお礼の品（花柄のエプロン）を届けようと、翌日、つぼみは山の畑地を訪ねた。畑では二匹の兎が大根の収穫に精を出しており、それが宇佐見おたねだと気づいた彼女はエプロンをそっと置いて立ち去る。その翌朝、旅館の外に一抱えの大根が置かれ、「いそがしくなったら、また、お手つだいにいきます」という美月の手紙が添えられていた。

本教材では、畑地の場面に至った時に、「兎」をキーワードとして物語を捉え返すと、老女の独言に
応じて娘が出現したこと、宇佐見という苗字（うさぎ、うさみみ）、娘の形象（色白でぽっちゃり、くるくるとよく働く）、ウサギダイコンの料理で耳がよくなること、といった一連の仕掛けを読み解くことができるようになっていく。また、本作品は、助けてくれた人間に動物が恩返しをする物語だと言えよう。つぼみは畑地を無償で貸し、美月は謝礼金を受け取らなかった。だが、昔話などと異なるのは、動物が正体を人間に見られても、そのまま別れとならない点だ。土地の貸与と恩返しの労働に続いて、両者はエプロン・ウサギダイコンという品物を贈り合い、さらに、今後も土地の無償貸与と労働の無償提供がなされ、つぼみと宇佐見おたねとの交流の継続を予感させるような構造になっている。

私は、本教材の主題を次のように捉えている。人に優しくすれば、自分にもその優しさはいつか返ってくるということである。土地を無償で貸したつぼみも、謝礼金を受け取らなかった美月も、見返りを求めず相手を思うがゆえの行動をしており、損か得かという考えに囚われていないことが分かる。互いに異なる者同士が共に生きていく第一歩も、そんな思いやりの応酬によって築かれていくものだ。動物や自然と関わり始めた主人公の名前も、これから花開く関係を暗示しているように思われる。

本授業では、あらすじを正確に読み取らせるとともに、登場人物の様子・行動・心情を手がかりとしながら、物語の仕掛けの面白さを発見させ、味わえるようにしていきたい。

3. 指導計画（全5時間）

- 第1時間目…全文通読。新出漢字・読み替え漢字の確認、難解語句の確認。段落分け。初発感想。
- 第2時間目…第一場面（P56. L1～P61. L8）の読解。
- 第3時間目…第二場面（P61. L9～P64. L5）の読解。
- 第4時間目…第三・第四場面（P64. L6～P65. L13／P66. L1～L7）の読解。物語の仕掛けの把握。
- 第5時間目…読解のまとめ（人間と自然の共存への関心喚起）。最終感想。……【本時】

4. 本時の学習活動（第5時間目）

- (1) 目標 ①美月の言葉や行動から気持ちを想像しながら物語を読む。

②美月が人間の姿で現れたもう一つの目的を考える。

③人間と自然が共存し合っていく大切さについて理解する。

(2) 展開

過程	学 習 活 動	指導上の留意点〔評価事項〕	時間
導入	1. 前時の復習をする。	○物語の仕掛けについて、前時に学習したことを発表させ、補足説明する。 ○美月が手伝いに来たのは、山の畑を貸してもらったことへの 恩返し だったことを改めて確認させる。	10分
展開	めあて 美月が人間のすがたになってあらわれた他の目てきを考えよう。		25分
	2. めあてをノートに写し、斉読する。	○めあてを板書し、指差しつつ斉読させる。	
	3. 第二場面を通読する。	○指名読み、または斉読させる。	
	4. 客とつぼみの耳が良くなったことで、何がどのように変わったかを理解する。	○児童に発言させ、それを板書し、必要に応じて補足説明する。 客 小鳥の声や、動物の立てる音 → 聞こえる 小鳥の巣を見つけて、ほかにうつつしてやれた つぼみ 遠くの小鳥の声や、小川のせせらぎ、はるか遠い山の上をふく風の音 → 聞こえる	
	5. 美月の気持ちになって物語を考える。 (他の目的①)	○なぜ、客とつぼみに生き物の声や自然の音を聞かせたかったのか、考えさせる。 〔評価①・②〕 客 =小鳥や動物の生活をこわしたり、命をうばったりしてほしくなかったから つぼみ =心のゆとりや安らぎを感じてほしかったから、一人ではないと気づかせたかったから。	
6. つぼみと美月（宇佐見父娘）が互いに与え合ったものについて振り返る。 7. 美月が人間の姿になって、つぼみの前に現れたことの意味を考える。 (他の目的②)	○両者が互いに与え合ったものを最初の段落から確認させる。 ○前の事項を踏まえた上で、両者の今後の共生が予感されることを理解させる。 〔評価②・③〕		
まとめ おん返しではない他の目てきは、生きものや自ぜんの大切さを人間に気づかせ、いっしょに生きたいという思いをつたえることだった。			
8. まとめをノートに写し、斉読する。	○指差しつつ斉読させる。		
9. 人間と自然の共存について理解する。	○人間と自然が共存し合っていく大切さについて考えさせる。 〔評価③〕	10分	

(3) 評価

①美月の言葉や行動から気持ちを想像しながら物語を読み進めることができたか。

②美月が人間の姿で現れたもう一つの目的を捉えることができたか。

③人間と自然が共存し合っていく大切さについて理解することができたか。

III- 1. 『はりねずみと金貨』教材分析

〈森のおくの草むらに、小さな金貨が落ちていました〉と語り始められる物語には、拾い主であった^{はりねずみ}針鼠の手で金貨が元の場所に戻される、という結末が用意されていた。

物語の序盤で、久々の雨に洗われて〈きらきら光るようになった金貨を針鼠が拾い上げ、(どこかでほしきのこでも買って、今年のはんびり冬をこすとしよう)と、購買のため使うことを思い立つ。ところが、あちこち探したものの、やがて(せっかく金貨があるのに、きのこのほうが見つからんとはのう……)という独言を漏らすごとく、支払いに用いる貨幣はありながらも肝心の購入対象が見つからない様子が描かれている。

この後、木の洞から顔をのぞかせ、「こんにちは、おじいさん。そのきらきらしてるのは、なあに」と問いかけた栗鼠^{りす}との出会いを皮切りに、物語の中盤では、針鼠と森の生き物たちとの出会いが次々に描かれていく。

「こんにちは、りすさん。こりゃあ金貨じゃよ。これで冬ごもりのために、きのこを買おうと思ってね」／「なあんだ。きのこがほしいなら、わたしが、ただであげるわよ」
そんなやり取りを経て、針鼠は栗鼠から袋詰め^ほの干し茸^{きのこ}を貰い受けた。別れ際の栗鼠の発言「その金貨は、くつにつかうといいわ。おじいさんののは、もうぼろぼろだもの」に促されて靴を探し求め、「どうしたね、じいさん。落とし物かい」と、鳥^{からす}から声をかけられる。

「いやなに、くつ屋をさがしとるんじゃよ。この金貨で、くつを買おうと思っての」／「くつを買うだって? どうして。くつぐらいおれが作ってやるよ」
という会話の後、鳥^{くちばし}で団栗^{どんぐり}の実に穴を開けて綺麗に削り、針鼠の足に合う靴を作ってくれた。別れ際の鳥の発言「その金貨は、ほら、あったかいくつ下にでもつかいなよ」に促され、靴下を買おうとしていたら「おじいさん、何をさがしているのさ」と蜘蛛^{くも}に声をかけられた。

「あたたかいくつ下をさがしとるんじゃよ。お金はあるんじやが、どこにも売ってなくてね」／「なんだ、それなら、おいらがあんだのをあげるよ。自分用に作ったら大きすぎてさ。おじいさんにはちょうどいいかも。ほらほら、はいてみてよ」

このやり取りの後、針鼠は蜘蛛から暖かくて柔らかい絹のような光沢の靴下を貰い受ける。蜘蛛は別れ際に「そのお金はどこかにしまときなよ。またいつか、役に立つかもしれないし」と告げた。皆の思いやりに感謝しながら、針鼠は〈ほかほかした気分〉で家路^{たど}を辿る。

いよいよ、物語も終盤である。わが家に近づいた辺りで、彼は冬に出る咳^{せき}を止めるのに必要な蜂蜜のなかったことに思い至る。買い求めようにも、既に森の空は赤く暮れかかっていた。そのとき、いつも彼が昔話を聞かせてやっている子熊が駆け寄ってきて、小さな蜂蜜の壺を手渡した。母親から託されたお礼の品だという。冬ごもりの挨拶をして走り去る子熊を見送り、針鼠は自分の立っている場所が、朝方に金貨を拾った辺りだと、ふと気づく。

(金貨は取っときなよ……か。じゃが、何のために? ほしきのこはあるし、新しいくつもある。あったかいくつ下に、はちみつまであるというのに)

手の中で金貨を転がしていた彼は、やがてそれを道端に置き、「だれかの役に立つかもしれないしな」と呟いて、わが家へ向かい歩きだすのだった。

物語の中盤で発せられた針鼠の各台詞から金貨の使用意図を看取しえたものの、結局のところ、この物語の中で金貨が貨幣としての機能を果たすことはなかった。だからこそ、終盤に配された内言「何のために？」は、おそらく本作品の主題——貨幣が機能しなくても物品を入手しえた事実が指し示すもの——とも関わるものである。《金貨》の機能を留保させたのが森の生き物たちの針鼠に対する《思いやり》であったことは言うまでもあるまい。冬を迎えるにあたり、独りで困っているであろう〈おじいさん〉。その状況の一端は、栗鼠による「おじいさんのは、もうぼろぼろだもの」という針鼠の靴に対する指摘から窺える。だとすれば、彼の購買意図を喚起するような栗鼠・烏・蜘蛛による促しは（靴・靴下といった物品を針鼠に贈るべく）当初より企図されたものだった可能性もある⁴⁾。ひいては、干し茸や蜂蜜さえ、その企図の一環であったかも知れない。

ところで、栗鼠・烏・蜘蛛・子熊のうち、針鼠にとって何かを《与える—与えられる》という相互的な関係（互酬の関係）が成立しているのは子熊との間においてのみである。しかも、子熊に対するそれは物品ではない。ゆえに、針鼠は一方的に《与えられる》存在だと見なす向きもあろう。だがむしろ、子熊に対する働きかけ——そして、おそらくその背後にある心持ち《自分のできることを誰かにする》——こそが、他の生き物たちと通底するところなのだ。栗鼠は所有する干し茸を贈与し、烏は自分の嘴で靴を加工し、蜘蛛は自分の糸で靴下を編み、母熊は所有する蜂蜜を贈与している。結末部に配された針鼠の台詞の中にある〈誰かの役に立つ〉という想いが、この作品の物語世界全体を優しく彩^{いろど}っていたのである。

III- 2. 『はりねずみと金貨』授業実践事例

この物語の授業では、針鼠の心情の変化、金貨の働き、登場人物同士の関係性を捉え、お金では得られない思いやりや仲間との繋がりの大切さを考えることを狙いとする。それぞれの読解に関わる場面での狙いと授業内容は次の通りである。なお、授業の流れについては、学習指導案（資料3）で確認していただきたい。

本時の中で段階を踏んで読み進めるため、先述した狙いに沿いながら、三つの柱を立てる。

①針鼠の金貨に対する気持ち、②針鼠の気持ちが変わった理由、③金貨の働き、である。

①を読み取る過程では、冒頭部の針鼠が金貨を拾って干し茸を探す場面で「せっかく金貨があるのに」という台詞に注目し、金貨を使いたいのになし茸のほうがなく残念だという心情を捉えさせる。ここで、消しゴムを金貨に見立てて場面を想像しながら、針鼠と同じ動作を児童たちに行わせ、より針鼠の心情に近づかせることができた。次に、物語の結末部で冬支度の品が揃い、金貨を道端に置く場面での針鼠の金貨に対する気持ち（気持ちが分かる行動）に線を引き、注目させる。ここでも同様に、児童たちには消しゴムを手の中で転がして置くまでの

動作を実演させた。針鼠の金貨に対する気持ちが冒頭部と変化していることを視覚的にも捉えつつ読み取らせるために、所々で動作を止め、その時の表情から気持ちを理解するよう促した。すると、表情の変化と気持ちの変化を結びつけて考えることができ、効果的であった。

②の把握のために、まず針鼠の気持ちの変化を読み取った上で、どうして変化したのかを考える。「針鼠にとって一番嬉しかったことは何だと思いますか」と発問することで、「金貨を使用せず冬支度の品が揃ったから」という理由ではなく、「森のみんなのおかげで冬支度ができたことや、森のみんなの思いやりや親切心に触れることができたから」という理由を導かせる。さらに、学習者の一人を教壇に立たせて、〈思いやり〉のイラストと〈金貨〉のイラストを天秤のように両手に持たせ、より大切だと思う方の手を挙げさせること（動作化）で視覚的に比較ができ、分かりやすくなると考えた。ここで、授業者が「金貨よりも思いやりの方が大切だと考えたから、針鼠は金貨を置くことができたんだね」と確認し、共通理解を図った。

③については、「金貨は思いやりと比べるためだけに出てきたのでしょうか」という授業者の発問から始め、針鼠の行動の契機や、彼が森のみんなと関わる契機にもなっていることを押さえ、登場者同士の関係図で確認する。この関係図は、〈針鼠〉を中心とし、周りに〈栗鼠〉、〈烏〉、〈蜘蛛〉、〈子熊〉それぞれのイラスト、さらに〈金貨〉と〈思いやり〉のイラストを黒板に貼り、関係性を整理させるものである。イラストの間に矢印を書き込む作業を行わせることで、登場者同士の関係性や、金貨との関わりを捉えやすくした。

まとめの中で、針鼠と子熊の《与える—与えられる》関係に注目させる。そして、「栗鼠、烏、蜘蛛は針鼠から何も与えられていないのに、どうして針鼠に優しくできたのでしょうか。あなただったらどんなときに人に優しくできますか」という発問をし、「自分だったら……」という視点で考えさせ、学習者自身の生活と結びつけると同時に、栗鼠、烏、蜘蛛の気持ちも読み取る。「人に優しくしてもらったとき」という学習者の意見に、授業者は「人に優しくしてもらったら、優しい気持ちになり、自分も周りの人に優しくできますね」と補った。この気持ちは、まさに栗鼠、烏、蜘蛛の気持ちそのものだと言えよう。栗鼠、烏、蜘蛛も違う誰かに優しくしてもらったからこそ、針鼠に優しくできたことを押さえ、図の中のそれぞれに違う誰かを書き加え、思いやりがどんどん繋がっていく様子を示した。それは、思いやりの繋がりと仲間との繋がりを重ねて考え、大切さを感じさせるためである。

最後に、登場者同士の関係図の中で、一見すると、針鼠は物をもらってばかりのように感じられるが、彼も森のみんなの優しさを受けた分、また別の誰かのためを思って金貨を置いたということに気付かせる。《恩送り》という言葉があるように、受けた恩をまた違う別の誰かに送る思いやりの温かさを感じさせたい。授業者は「みんなも優しくしてもらったから何かをしてあげるのではなく、誰かに優しくしてもらった分、自分も優しい気持ちになって誰かに優しくできるように接していけるといいですね」とまとめ、学習者自身に置き換えて考えさせ、今後の生活に繋げていくようにした。

【資料3】『はりねずみと金貨』学習指導案

第3学年3組 国語科学習指導案（略案・本時案）

平成28年 7月12日 第3時限 3年3組教室

（在籍児童数 男子14名、女子11名、計25名）

授業者 大園奈菜、佐野叶恵、藤木晴香

1. 単元名・教材名

世界の物語をしょうかいしよう・『はりねずみと金貨』

（ウラジーミル・オルロフ文、田中潔訳、バレンチン・オリシバング絵）

2. 教材観および授業構想

本教材は、年老いた針鼠が冬ごもりの支度のために森を道行く物語だ。あらすじは次のようになっている。ある朝、針鼠は森の草むらで金貨を拾う。それで冬ごもりに必要な品を購入しようと考え、干し茸を探し求めた。やがて金貨の煌めきに目を留めた栗鼠に声をかけられ、干し茸を与えられる。栗鼠から靴を買うよう勧められて歩いていくと、鳥に声をかけられ、靴を無償で作ってもらうことになる。鳥から靴下を買うよう勧められた彼は、次に蜘蛛と出会って靴下を与えられた。金貨を取っておくよう蜘蛛から告げられたが、日の暮れかかる頃、その用途として蜂蜜の入手を針鼠は思い立つ。その時、子熊が駆け寄ってきて、彼に小さな蜂蜜の壺を手渡した。いつもの語り聞かせに対する謝礼だという。こうして、金貨を使わないまま、冬支度の品が全て揃ったのである。ふと朝の草むらの辺りに佇んでいることに気づいた彼は、誰かの役に立つかも知れないと考え、金貨を元の場所へ置く。

本教材では、金貨が重要な役割を果たすのだが、結局、それは貨幣として使われることがないという展開になっている。冒頭で草むらに落ちていた金貨と、結末でそこへ再び置かれた金貨——これらを一見すると反復型にも思えるが、金貨に対する針鼠の価値観の転換を経ている（同じ金貨だが、針鼠にとっては別物となっている）ので、変化型の物語と捉えたい。すなわち、当初は（せっかくだが）金貨があるのに）[P65]という内言から、滅多に得られない物として特別視していることが知れる。ところが、全てを手に入れ、金貨が手元に残った時、針鼠は「何のために？」[P73]と、金貨の必要性を疑い、見失っている。この変化は、森の生き物たちの親切がもたらしたものだ。ただし、貨幣として機能しなかったものの、本作品の金貨には、①「お金で得られるものとお金で得られないものを対比する働き」、②「針鼠が行動を起こすきっかけ、生き物たちが彼に声をかけるきっかけという働き」を指摘できるだろう。ところで、オルロフが本作品を書いた時代のウクライナは、国全体が貧乏で必要な物を得にくかったという。貨幣が機能せず、いたわり合いながら物々交換をする暮らしの中で、不幸な人や困っている人へ手を差し延べる人が多かったそうだ。

私は、本教材の主題を次のように捉えている。私たちは、お金を用いて必要な物や欲しい物を買うことができるが、お金では得られない思いやりや信じ合える誰かとの繋がりこそが大切なのだ。私たちは決して一人では生きていけない存在だから、人から大切に思われるためには自分も人に対して思いやりの心で接していかなければならない。物語の冒頭と結末が同じ場所であったことの意味は、金貨が一回りして元の場所に帰ってきたように、人々の思いやりは巡り、誰かにした親切はやがて巡り巡って自分（あるいは別の誰か）へと、さらに巡っていくことを表している。

本授業では、針鼠の心情の変化に着目させて、児童たちを主題の読み取りへと導いていきたい。さらに、様々な地域や国の物語を読み、紹介カードを作る活動を通して、物語に対する関心を高めていけるよう指導していく。なお、児童たちが紹介した物語を、学級文庫に配架する予定である。

3. 指導計画（全6時間）

第1時間目…全文通読。新出漢字・読み替え漢字の確認、難解語句の確認、段落分け。初発感想。

第2時間目…第一・第二場面（P64. L1～P65. L13／P66. L1～P71. L1）の読解。

第3時間目…第三場面 (P71. L2～P73. L5) の読解。
 第4時間目…第四場面 (P73. L6～P74. L5) の読解。
 第5時間目…読解のまとめ。最終感想。 ……【本時】

4. 本時の学習活動 (第5時間目)

- (1) 目標 ①物語の主題を捉える。
 ②作中における金貨の役割を理解する。

(2) 展開

過程	学 習 活 動	指導上の留意点〔評価事項〕	時間
導入	1. 前時の復習をする。	○登場人物を整理し、物語の内容について振り返らせる。	8分
展開	めあて 金貨のはたらきと、登場人物どうしのかん係を考えよう。		35分
	2. 本時のめあてを確認する。	○めあてを板書し、指差しつつ斉読させる。	
	3. 第四場面 (P73. L6～P74. L5) の範読を聞き、針鼠の心情が分かる箇所に傍線を引く。	○針鼠の心情を表す箇所に着目させ、第四場面を範読する。	
	4. 傍線を引いた箇所を発表する。	○拾った時の気持ちと対比させながら板書し、針鼠の心情の変化に気づかせる。	
	5. 針鼠の心情が変化した理由を考え、ワークシートに書く。	○机間指導を行い、なかなか書けずにいる児童には、適宜、助言する。	
	6. 自分の考えを発表する。	○発表を板書する。〔評価①〕	
	7. 読解に関わる本文 (P65. L2～P66. L8) を音読する。	○金貨の役割を考えるよう促し、指名読みにより音読させる。	
	8. 金貨の役割について考えを発表する。	○発表を板書する。 ○金貨が貨幣として機能せず、針鼠の行動の契機、動物たちと関わる契機になっていることを理解させる。〔評価②〕	
	9. 登場人物同士の《与えること—与えられること》の意味について確認する。	○子熊以外の生き物たちが、代価 (金貨) を求めていることに気づかせる。	
	10. 登場人物の《与え—与えられる》関わり方から、物語の主題を考える。	○針鼠と子熊との《与え—与えられる》関係を踏まえ、他の生き物たちとの間には針鼠の側から《与える》要素がないことに着目させる。〔評価①〕	
まとめ	金貨のはたらきは行動や出会いのきっかけだった。登場人物どうしのかん係からは、お金よりも大切な思いやりや、なかまのつながりがあることがわかった。		
	11. まとめを確認する。	○指差しつつ斉読させる。	
終結	12. 次時の予告を聞く。	○いろいろな国や地域の物語を読んで、紹介カードを作ることを予告する。	2分

(3) 評価

- ①物語の主題を捉えることができたか。
 ②作中における金貨の役割を理解することができたか。

結

私の担当する講座のうち、二年次前期に配当された『国語科指導法』（小免必修科目）と『総合演習』（選択科目）において、前者で国語科学習指導案の作成演習を行い、後者で学生たちが自身の作成した指導案に基づき模擬授業演習を行うというかたちをとっている。2016年度も同内容で開講し、前者は例年通り約三〇名ずつ三クラス、後者は例年三〇名ほど登録があるのだが本年度は九名が受講した。内訳は発達学専攻七名、基礎学専攻二名であった。

したがって、本稿の分担執筆者の白谷・平田・佐野は本学人間科学部人間発達学科の二年生である（2016年10月執筆時）。二年次前期『総合演習』講座において、班の仲間たちと共に取り組んだ国語科模擬授業の実践について、班を代表する形でまとめてもらった。ゆえに、彼女たちの模擬授業に関する記述は、それぞれの班員たちの議論や模擬授業リハーサルを経たものであり、彼女たち個々の成果であると同時に、各班のメンバーたちとの協働作業の成果でもあることをお断りしておく。その意味で、各班員の上承を得て、それぞれの学習指導案を全員の氏名を記載した原況のまま掲載することにした。

注

- 1) 『ゆうすげ村の小さな旅館』は『新編 新しい国語』三上（東京書籍、2015年2月）に、『サーカスのライオン』、『はりねずみと金貨』は『新編 新しい国語』三下（東京書籍、2015年7月）に収載されている。本稿における引用は、これらの教科書収載本文を用いた。なお、引用における「／」は改行箇所を示し、下線は引用者が私に付したものである。
- 2) 西本稔「サーカスのライオン（川村たかし）」（『物語・教材分析と創作』第5集、太陽書房、2016年4月）が指摘するように、現実的に言えば〈痙攣や発作、嘔吐を起し、死の恐れがあるため、チョコレートは猫科の動物に与えてはいけない食べ物として有名〉なのだが、〈同じものを共有し合いたい大切な存在だとじんぎのことを思〉う男児の気持ちにこたえるべく、じんぎは〈苦手であろうと嬉しかったため、貰ったのである〉。p.104。
- 3) 白瀬浩司「思いやりの心を贈り合う——《教材研究》茂市久美子『ゆうすげ村の小さな旅館』（小学三年生）——」（『九州女子大学紀要』第43巻1号、2006年9月）。
- 4) 中島夏美「はりねずみと金貨（ウラジミール・オルロフ）」（『物語・教材分析と創作』第5集、太陽書房、2016年4月）、pp.109-111。

**“Circus no Lion”, “Yusuge-mura no Chiisana Ryokan” and “Harinezumi to Kinka”
as the educational-materials for Japanese language art education**

Koji SHIRASE, Kanae SHIRATANI, Rie HIRATA, and Kanae SANO
Department of Education and Psychology, Faculty of Humanities,
Kyushu Women’s University
1-1, Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi 807-8586, Japan

“Circus no Lion”(written by Takashi Kawamura), “Yusuge-mura no Chiisana Ryokan” (written by Kumiko Moichi), and “Harinezumi to Kinka”(written by Vladimir Orlov), these fairy tales are in the textbooks of the elementary school and we can read them as the educational materials. At Kyushu Women’s University, we are lecturing on the methods of the class-management for the Japanese language art education to our students who aim at the elementary school teachers. Therefore, in this essay, we will analyze “Circus no Lion”, “Yusuge-mura no Chiisana Ryokan” and “Harinezumi to Kinka” as the educational materials for Japanese language art education. And then, we introduce the actual examples of the classes.

Keywords : Teaching-materials analysis, Actual examples of the classes